

1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第9回

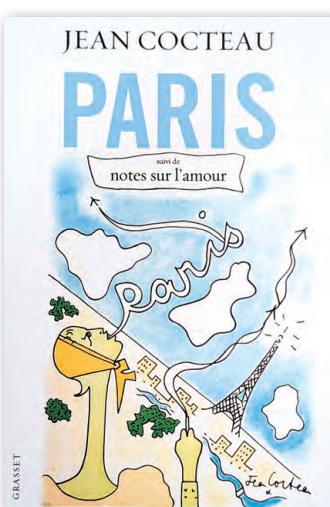
詩は鉄槌である——ジャン・コクトーは私たちの同時代人

私事で恐縮だが、私は数字を左から右に書き写すのが不得意である。22が33に、454が545にならぬよう、いつも息を止め、神経を集中させる。20時57分発の新幹線に乗るため余裕を見込んで30分早く駅に着いたはずが、夜10時20分の誰もいないホームで間違いに気づき青くなつたこともある。人や現象を数値化のフィルターを介してしか論じない社会に不安と怒りを抱く者にとって、ジャン・コクトー(1889–1963)は希望であり、癒しである。

映画、演劇、バレエ、詩、散文、絵画……複数の表現領域を軽やかに行き来し、晩年には人文科学の殿堂アカデミー・フランセーズ会員となったコクトーは、「技のデパート」と呼ばれる万能の表現者だが、この輝かしい経歴の背後にいたのは、正真正銘の落ちこぼれの少年だった。通信簿には「利発だが集中力弱く、しばしば放心する」とある。名門校を退学させられ、大学入学資格試験には幾度も失敗した。第一次世界大戦では軍人として志願するも、2日で帰還を命じられた。

しかし、社会の「優等生のライン」からはじかれるたび、コクトーはまるで鎖を解かれたかのように、世界を呼吸し作品を生み出していった。進学を諦めた18歳からは特に、オスカー・ワイルドやボードレール、ヴェルレーヌを中心の拠り所とし夢中で詩を書き、絵を描き続けた。その詩が時の名優の目に留まり、企画された朗誦会で披露されたことで一躍脚光を浴びた。以後、シュルレアリストのようなエリートからは一度ならず嘲笑を浴びながらも、バレエや舞台芸術、映画、モードやジャズなど“かたち”的世界では、人々とゆるやかにつながり、20世紀の表現藝術の要となつた。

Jean Cocteau, *Paris: suivi de notes sur l'amour*,
Collection Les Cahiers Rouges, Éditions
Grasset et Fasquelle, 2013. (表紙:コクトーによる
挿画《空気 フランス パリ》Air France Paris)



彼の人生はまた、「おくりびと」としての道でもあった。9歳で父を、19歳で友人をいずれもピストル自殺で失い、戦場では軍人ではなく看護兵として無残な死の現実を経験した。1923年に恋人の詩人ラディゲが早逝すると阿片に手を染めた。愛する者の死に遭遇する痛みを知り尽くしていたからこそ、それを恐れる気持ち自体が、新たな表現への回路となつた。

社会の評価軸から零れ落ちた彼の生は、「できなさ」や「不完全さ」を抱える者にとっては救いとなる。コクトーは「私は万年筆の威光(stylographe)ではなく職人の手仕事を信じる」と公言し、理屈より感覚を重視した。彼にとって文字は「踊る虫」のようにさえ見えたと言われるが、文字をめぐるその混乱さえも、「正しさ」と「数値化」の圧力に抗する、世界を心でつなぎ直す道を拓いたのではなかったか。

アレクサンダー・カルダーが1920年代後半のパリで行った針金人形の「カルダー・サーカス」が、観客を、死と隣り合わせのアクロバットを楽しむ共犯者とする無邪気さで人気を博したことは、10月号本欄で触れた。このファンタジックな悪意の催しを世界に紹介したのは他ならぬコクトーだった。コクトーは、カルダーの、死を笑い飛ばすような明るさに救われただろう。コクトー特有の一筆書きのようないラストレーションが、カルダーの針金アートとどこか似ているのは、単なる模倣でもなく、単なる偶然でもない。

コクトーの表現は、既存の社会秩序が要請する「正確さ」の圧力に対する、色と形と音楽とユーモアで放たれる静かな鉄槌として、ポップにしてラディカルに、今も私たちを魅了する。

◆参考文献

『ジャン・コクトー全集』監修：堀口大学、佐藤 肇（東京創元社、1980年～1987年）
Le monde de Jean Cocteau (Bunkamura ザ・ミュージアム、光琳社出版、1995年)